Arch Jpn Chir 61(1), 95～97, Jan., 1992

第18回 京滋食道疾患懇話会

日　　時：平成3年6月29日（土）午後4時～7時
場　　所：京都センチュリーホテル1階　豊明の間
世 話 人：京都第二赤字病院外科　徳田　一
耳鼻咽喉科　大島　渉

1）喉頭を温存した下咽頭癌手術症例

京都第二赤十字病院　耳鼻咽喉科
○粂　俊之，大島　渉
竹上　永祐，土井　玲子
気管食道科
寺薗　富朗，紀平　晋也
検査部
加藤　元一

喉頭を温存した下咽頭癌手術症例として，いわゆる癌肉腫の1症例を報告した．症例は，64歳の男性で，主訴は咽頭異物感であった．下咽頭輪状後部に茎をもつ約3×2 cmの表面分葉状のポリープ様隆起性病変を手術にて摘出した．下咽頭残存粘膜を一次縫合し喉頭を温存した．

病理組織学的には，HE 染色にて，短紡錘形細胞が，storiform pattern を呈し，悪性線維性組織球腫を疑わせたが，銀染色，PTAH 染色，keratin 染色にて上皮由来が確認された．また，腫瘍の茎部に扁平上皮癌を認め，so-called carcinosarcoma と診断された．

2）当科中下咽頭，食道癌の再建と治療成績

国立京都病院　耳鼻咽喉科
○須藤　正治，永原　國彦
野村　淳，南　八王

当科過去10年間に経験した中咽頭20名，下咽頭20名，食道癌10名計50名（手術施行したもの：42名）にたいして，選択した加療手順は手術のみ14名，手術＋術後照射12名，術前照射＋手術5名その他11名であった．再建法は，殆ど遊離皮弁で，下咽頭頸部食道癌では25名中13名が遊離空腸を用いている．胃管3名，腹直筋皮弁がそれについでいる．中咽頭では腹直筋皮弁9名，遊離空腸4名の順である．術後合併症は，創感染9名，再建皮弁壊死3名，リンパ漏2名などである．50名中現在生存しているのは17名，再発死19名，腫瘍死6名，術後合併症死2名その他6名で，再発部位は中咽頭癌T4症例の3名のみで局所に生じた．他は遠隔転移で，この制御が今後の課題である．

3）食道平滑筋肉腫の1例

滋賀県立成人病センター　外科
渡辺　剛，野田　秀樹
木村　敬三，渕上　哲
野中　敦，蔡　元奎
北村　脩
病理
松本　正朗

症例は48才，女性．主訴は嚥下困難．食道透視にて下部食道に約10 cmに渡る圧排像あり．内視鏡検査では，門歯列より約30 cmの部位に表面平滑な隆起性病変を認める．CT では気管分岐レベル以下の部位に8×8×5 cm の腫瘍像を認め，内部は不均一であり食道との境界も不明瞭であった．以上より s/o 食道粘膜下腫瘍の診断で手術施行す．術中，周囲組織に軽度の癒着を有した食道由来と思われる腫瘍を認め，胸部食道亜全摘術を施行す．腫瘍は大きさ10×6.2×7 cmで壁外増殖を示し，その内容は淡緑色ジェリー状で著明な粘液変性をきたしていた．病理組織検査により食道平滑筋肉腫と診断した．食道平滑筋肉腫は稀な疾患であり簡単な文献的考察を加えて報告した．

4）CEA 高値で脳転移を認めた下部食道癌の1切除例

京都第一赤十字病院　外科
○秋岡　清一，栗岡　英明
大内　孝雄，仲　成幸
松下　努，内山　清
山本　拓実，塩飽　保博
李　哲柱，池田　栄人
武藤　文隆，橋本　京三
田中　貫一，原田　善弘
伊志嶺玄公

症例は69歳男性，嚥下困難，摂食困難にて近医受診し，UGIS, GF にて胃内に浸潤した下部食道癌を指摘された．CEA は 465 ng/ml と異常高値を示したが，CT, US ではリンパ節1.3の転移を認めたが肝転移は認めなかった．右開胸開腹にて食道亜全摘，胸腔内食道胃管吻合を行なったが，術后 anisocoria や神経症状の増悪を認め頭部 CT 施行し小脳その他に多発性脳転移を認めた．このため小脳腫瘍摘出，術后 Co 照射を行ない神経症状の軽快を認めた．本症例は小脳腫瘍が大きく急速に神経症状が進行したこと，原発巣の初回手術で6ヶ月以上の生存が期待されること，脳腫瘍の大部分が切除可能で切除により神経症状の改善が期待されたことより積極的な脳腫瘍切除を行ない良好な結果を得た．我々は今後とも遠隔転移のある食道癌に対しても患者の QOL を考慮し積極的な切除を行なって行きたいと考えている．

5）食道病変を伴った類天疱瘡の一症例

滋賀医科大学　第二内科
○小山　茂樹，塩見　毅彦
中條　忍，馬場　忠雄
細田　四郎

瘢痕性類天疱瘡に伴った表層性食道粘膜剥離症の一症例を報告した．

症例は73歳男性で，1985年より全身皮疹があり，1989年8月より食道入口部の潰瘍性病変が，1990年11月より口腔内病変が出現し，1991年3月より全食道の粘膜剥離状態となった．皮膚病変は瘢痕性類天疱瘡で，食道の内視鏡下鉗子生検は粘膜下組織の解離で，表層性食道粘膜剥離症と診断した．

食道病変は治療に抵抗し，改善が得られなかった．

類天疱瘡に伴った表層性食道粘膜剥離症の本邦報告例は1984年豊原らの一症例のみであった．

6）食道表在癌症例の検討

滋賀医科大学　第一外科
○内藤　弘之，川口　晃
遠藤　善裕，寺田　信國
谷　徹，石橋　治昭
柴田　純祐，小玉　正智
滋賀医科大学　第一病理
九嶋　亮治，服部　隆則

教室で経験した食道表在癌切除症例のうち，腺癌を除いた11例について epidermal growth facter receptor (EGFR), 及び，食道癌核内 DNA ploidy pattern と予後との関連について検討した．男性8例，女性3例で，ep 1例，sm 10例であった．中分化型扁平上皮癌が9例と最も多く，基底細胞癌を1例認めた．局在部位別では Im が7例と最も多く，次いで Ei が3例であった．diploid を示すものは6例，aneuploid は5例で5年生存率はそれぞれ83.3%，40.0%と aneuploid を示す症例に予後が悪い傾向を認めた．一方，EGFR の発現陽性例は6例，発現陰性例5例で，5年生存率はそれぞれ，44.4%，75.0%と EGFR 発現陽性例に予後が悪い傾向を認めた．EGFR が発現せず diploid を示した症例（5年生存率100%）と，EGFR が発現し，aneuploid を示した症例（5年生存率33.3%）の間には有意差が認められた．DNA ploidy pattern 及び EGFR は食道表在癌において予後の指標となりうるものと考えられた．

7）88才食道癌の手術経験

京都府立医科大学　第2外科
○小森　直之，園山　輝久
小林　雅夫，中田　雅支
久保　速三，小林　義典
谷岡　保彦，植木　考宣
沢辺　保範，能見伸八郎
山岸　久一，岡　隆宏

高齢化社会が進むにつれて，高齢者の食道癌手術の機会もまた，増加してきた．今回我々は，88才食道癌手術の経験を検討し，以下の結果を得た．

術前検査において，肺，心，腎，肝，栄養，血圧，

血糖の項目中有意に異常を示したものは，1項目「栄養」のみで，全身状態及び局所所見から重篤な合併症がなかったが，術前，環境の変化に関連した若干の思考過程の障害が出現したため，高齢者であるということを考慮に入れ，手術時間の短縮，リンパ節郭清手術術式を検討した結果，開腹，左頸部切開にて食道抜去術を施行，後縦隔に胃管を挙上して頸部吻合とした．

術後，積極的な対話及び早期離床，早期歩行にて術後合併症の予防に努めた結果，術後，十分なQUALITY OF LIFEが得られたことをここに報告する．

8）胃癌，直腸癌根治術後の食道癌の1手術例

京都府立与謝の海病院　外科
○藤原　郁也，内藤　和世
中路　啓介，牧野　弘之
戸田　省吾，大森　吉弘

症例は73才男性で，64才時に直腸癌 (RaRb, 2, pm, P_0, H_0, n (−), M (−) Stage I) にて直腸切断術を施行した．その5年後の68才時に胃癌 (M, ant, P_0, H_0, n (−), ps (−) Stage I) にて胃亜全摘術を施行した．さらにその4年後の73才時に食道癌 (ImIu, A_3, N_1 (+), M_0, Pl_0 Stage IV) にて胸部食道，残胃全摘，有茎空腸による食道再建を施行した．近年，重複癌の増加傾向があるが，3重複癌は比較的まれであり，臨床的に食道癌を含む3重複以上の癌が証明されたものは我々が検索し得たものが40例あり，食道，胃，直腸の組合せは5例のみである．消化器管に限局し全例に切除術が施行された3重複癌症例を経験したので報告する．

9）食道切除後再建胃管の酸分泌機能

京都大学　第一外科
○橋本　充右，嶋田　　裕
今村　正之，戸部　隆吉

今回我々は，胸部食道癌切除後再建胃管の胃底部および前庭部において24時間 pH モニタリングを行い，その酸度を検討した．対象は胸部食道癌患者30例で，述べ41回の pH 測定を行い，30例中20例について空腹時血清 gastrin を測定した．胃底部の全測定期間中 pH 頻度分布を中心に，症例を大きく1群（高酸群），2群（中間群），3群（低酸群），4群（特殊群）に分類し，1群中，前庭部も高酸のものを 1a, そうでないものを 1b とした．pH 中央値を各群で比較すると，3群は測定期間中常に高 pH であったが，1群では，夜間および食後に胃底部が低 pH となり，2群では，夜間胃底部が低 pH となるだけの酸分泌があると思われた．術後長期経過例では，胃底部夜間 pH が低い例が多く，術後潰瘍発生に注意する必要があると思われた．1群，2群では，夜間前庭部 pH＜3時間分布と空腹時血清 gastrin 値の間に有意に逆相関がみとめられた．

10）再建術式よりみた食道癌術後のQuality Of Life

京都府立医科大学　第一外科
田村　隆朗，高橋　俊雄
小島　　治，沢井　清司
山口　俊晴，山根　哲郎
萩原　明於，谷口　弘毅
北村　和也，野口　明則
伊藤　昌彦，松井　道宣

我々は5年前より食道癌切除術の再建経路として主に後縦隔を用いているが，以前行っていた胸骨前，胸骨後の症例と縫合不全の発生率，吻合部狭窄，在院日数並びに，食事内容，嚥下状態，食事に関する満足度，体重の変動について比較検討したので報告する．

対象は1980年から1990年までに当科において切除された胸部食道癌59例で吻合部狭窄以外は後縦隔経路が良好であった．

QOL に関するアンケートは41例について有効で，各項目いずれに於いても後縦隔例が良好な成績であり，今後症例を増やして更に検討したい．

特別講演（18:00〜19:00）

『食道癌外科治療の問題点と今後の展望』

久留米大学医学部　第一外科
掛川　暉夫教授